

県民スポーツ祭柔道競技におけるキッズルーム（はびねするーむ）設置について

設置日 2022年 7月16日（土）、17日（日）

場所 福井県立武道館 第2会議室

設置の背景

福井県柔道連盟女子部では、福井県内において、子育て世代の女性とそのパートナーが柔道にかかわる活動（選手・審判・役員など）と子育てを両立することができる環境づくりを目指して、情報収集や啓発活動などを計画している。今回、全日本柔道連盟主催大会で設置されている「スマイルルーム」を参考に、今年度の県民スポーツ祭において大会に出場する選手・審判員・大会役員のためのキッズルーム「はびねするーむ」を開設した。

「はびねするーむ」概要

目的	大会に参加する選手・大会役員・審判員の子供を大会会場内において一時預かり・託児をすることで、育児をする男性・女性が同じ条件で大会に参加できるようにする。
対象	大会に出場する選手、大会役員・審判員の子供（1歳～6歳の未就学児）
利用時間	大会開催期間 今回の場合：7月16日（土） 9：00～12：40 13：40～16：00 7月17日（日） 9：00～11：45 12：45～14：30（大会全日程終了時）
利用料	1日500円
スタッフ	保育士2名、女子部役員2名、補助員1名
場所	福井県立武道館 第2会議室後方

事前準備

① 場所

県立武道館第2会議室の後方約12㎡をキッズルームスペースとした。

② 予算

県柔連執行部に、おおよその予算案を作成し、提出。

③ 保育士の募集

保育士募集のポスターを作成し、県柔連ホームページ、SNSへの掲載を実施。また、女子部役員のネットワークを活用して保育士と連絡を取った。

④ 備品（ジョイントマット）の確保

ネット通販で購入。大判8枚1組のものを4セット購入した。

⑤ 保険（障害・損害賠償保険）の契約

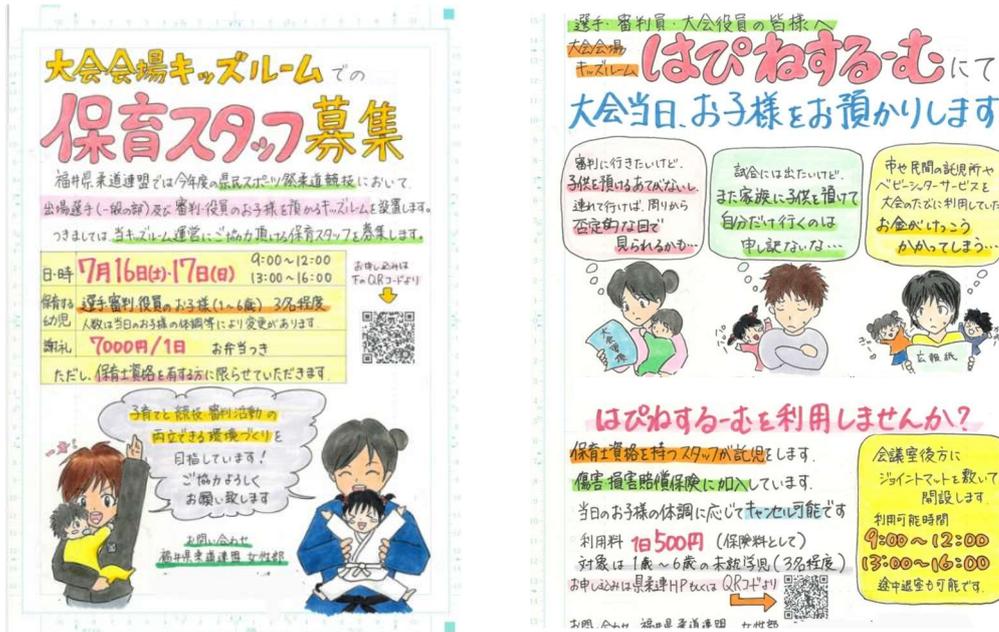
あいおいニッセイ同和損害保険の保険へ加入。キッズルーム運営期間（2日間）の、託児中に起こった事故に対する障害・損害賠償保険に加入した。

なお、保育士側の補償は、県民スポーツ祭本部（県スポーツ協会）が大会で加入しているイベント保険で対応可とのことだった。

*今回、事故等は発生せず、保険の利用はなかった。

⑥ 利用者の募集

③と同様にポスターを作成し、県柔連ホームページ、SNS への掲載を実施した。



前日準備

・県立武道館第 2 会議室後方にジョイントマットを敷き詰めて、キッズルームスペースを確保した。

今回は、大判ジョイントマット30枚（5枚×6枚）を使用した。

- ・ベビーサークルでバリアードを作り、出入りが1方向のみとなるようにした。
- ・「はびねするむ」の看板を作成し、スペースの役割、名称を視覚化した。



当日の様子

朝、利用者とともにやってきた子供は、最初緊張した様子ではあったものの、すぐに保育士と打ち解けて、おもちゃで遊び始め、保育士の手を引いて遊びに誘う様子もあった。

基本的に、はびねする一む内にておもちゃで遊んだが、審判監督会議中（16日10:00～10:30、17日9:30～10:00）は館内の廊下やエントランス等で時間を過ごした。また玄関外ロータリー付近にてシャボン玉をすることもあった。

審判監督会議内で、女子部役員よりはびねする一む開設についてアナウンスを行ったこともあり、開設中の出入りは最小限にとどめることができた。子供たちが安心して過ごすことのできる環境づくりに、多くの審判員・大会役員が賛同し協力していただいた。

昼食時間は、保育士の休憩時間のため、保護者にいったん子供を引き取ってもらった。（利用者2名のうち1名は午前からの利用だったため、昼食時間中にお迎えが来た。）しかし、昼食時間前に眠ってしまった子供がおり、その後昼食時間で室内に人が増えて来ると、話し声で起きてしまうことがあった。

安全管理の観点から、開設中は女子部部員が様子を観察し、定期的な安全点検を行った。また、タブレットによる定点撮影を行い、開設中の事故に備えた。

二日間を通して、大きな事故もなく、保育士も子供たちも健康的に過ごすことができた。



はびねする一む開設における振り返り

① 保育士からの聞き取り

<良かった点>

- ・ジョイントマット、おもちゃ、布団の準備が大変良かった。
- ・いろいろなおもちゃがあったため、子供たちも楽しんでいる様子だった。

<気になった点>

- ・できれば一部屋をキッズルームとして押さえられると理想的。もしくは部屋をパーティションなどで区切って空間を分けた方がいい。
- ・会議室内にある机の高さと、子供の顔の高さが同じで、数も多く危険を感じた。
- ・今後、預かる子供が多くなった際に、けがなどに気を付けていきたい。

② 補助員からの聞き取り

<良かった点>

- ・ジョイントマットやおもちゃ、タオルケット等準備がされていた。
- ・保育士さんたちがとても優秀で、子供たちがとても楽しく遊んでもらっていた。
- ・親御さんがお子さんの様子を見て安心していらっしまった。
- ・キッズルーム開設はとても良い取り組み。他のスポーツ大会でもぜひ取り入れていただき、継続していくことを望む。

<気になった点>

- ・会議室の一角をキッズスペースとして使用していたため、審判会議が行われる時間帯や審判員の昼食時には、子供も保育士も退出しなければならなかった。昼食時、ちょうどお昼寝をしている子供がいて、ざわざわしてきたために起きてしまった。キッズルーム専用の部屋を貸していただきたい。

③ 利用者からの聞き取り

<利用者 A（男性、審判員）>

- ・大会会場で子供を預けられるというのが大変ありがたい。大会審判などで土日に家を空ける際に子供と一緒に出掛けることができると、奥さんの手が空くので奥さんのリフレッシュにもつながる。家族サービスができていない部分を補える。
- ・保育のプロである保育士に預けられるので、安心できる。
- ・環境設定もよかった。おもちゃもしっかり準備されていて楽しんでいる様子だった。
- ・審判に出やすい。
- ・奥さんも「楽だった」と言っていた。やりたいことがはかどったという。
- ・次回もあればぜひ利用したいし、継続して開設してほしい。

<利用者 B（男性、選手、審判員）> *C と夫婦

- ・保育士という専門的な知識を持った人に預けることができたので、安心して大会に参加することができた。
- ・若い世代の選手・役員・審判員が使えるように継続的に開設してほしいと強く思った。
- ・無観客試合が主となっている中で、パートナーが会場に来て観戦しながら子供を見ることができないので、子供を連れて試合に行くことができると、パートナーの負担が軽減できる。
- ・子供が大会会場に来るきっかけとなるので、親が試合をする姿や雰囲気を知ってもらうことができ、柔道に興味を持つきっかけになることが期待できる。

<利用者 C（女性、審判員）> *C と夫婦

- ・女性柔道家としても、女性審判員としても、今回のように託児所があることは大変ありがたい。「小さな子供を大会会場に連れて行っても大丈夫である」ことは、今後、子育て世代の女性柔道家や女性審判員が活躍しているために必要であると思う。
- ・子供が本当に楽しそうだった。いろいろな刺激を受けることができた様子だった。

- ・保育士からどのような様子であったのか丁寧な説明があり、利用中の子供の様子を知ることができた。
- ・小さな子供がいると、どうしても大会への参加を検討する際に「子供をどうするか」を考える必要がある。子供にとっても「大会のたびに離れ離れになる」というネガティブなイメージよりも「一緒に行って、先生と楽しい時間を過ごすことができる」というポジティブなイメージがつくほうが良いと思う。そういった意味でも、会場内で子供を預けられるシステムは継続して行ってほしい。

上記以外にも、役員として参加していた先生方から「とてもいい取り組みだ。」「自分自身も小さな子供がいたときにはいろいろなところに連れていき、いろいろと言われてきた。このようなキッズルームがあることは本当にいいこと。」といったご意見をいただいた。

昨今は「核家族が増えたこと」や「祖父母が現役で働いており、家にいないこと」などから、実家に預けることが容易ではない環境となってきた。一方、保育や子育てに関するサービスは年々充実しており、一時預かりのサービスも増えている。しかし、利用には少なからずお金がかかることから、そう頻繁に利用できるとは言いがたい。

また、地方の柔道界を見たとき、まだまだ男性社会が根強く、女性活躍が浸透しているところは少ない。その背景には周囲の理解・配慮の不足、環境の不十分さなどがあげられる。本県においても、子供を会場に連れてきて審判をすることに否定的な意見が上がった。そこで、理解促進につながるよう、連盟の意識改革を一つの目標として、キッズルーム設置に取り組んだ。

今回、キッズルーム開設にあたり、女性審判員だけでなく男性審判員からも利用希望が出たことは、子育てが女性だけのものではなくなっていることを顕著に表している。「家族みんなで子育てする」「社会みんなで子育てする」ことを柔道界においても実践していくことは、今後女性活躍を推進するうえで必要不可欠な考え方であり、柔道の普及発展につながるのではないかと考える。

今年度は、試験的運用ということで今回のみの実施となる。課題や改善点も見つかったので、次年度に向けて解決に取り組んでいきたい。

今回のキッズルーム設置を県内外に広く周知し、「小さな子供がいるから」という理由で大会への参加や審判活動をあきらめている女性柔道家が再び柔道場へ足を運ぶための一助となることを切に願っている。

報告者 福井県柔道連盟 女子部 近藤愛美